

# 第 51 回いそご文化資源発掘隊 校歌と市歌 もうひとつの真実

開催日：2021年10月24日（日）

開催時間：14時～16時

会場：横浜市八聖殿郷土資料館

参加者：33人

※新型コロナ感染拡大防止のため、定員の半分で開催。

お話：清水一徹（杉田劇場職員）

演奏：中村 牧（杉田劇場館長）

\*\*\*\*\*



地域を歌った《ご当地ソング》といえば、「ブルーライトヨコハマ」や「伊勢佐木町ブルース」などが有名だが、関東大震災後に原三溪が作詞した「復興小唄 浜自慢」がある。その2番に、♪屏風ヶ浦の朝なぎに～という歌詞が出てくる。

この歌は忘れ去られているが、現代では校歌の中に地域の風景が登場している。そんな校歌を調べていくと、知られざる歴史が発掘された。

そして開港 50 周年を記念して作られた横浜市歌。いま皆さんが知っているような歌になるまでには、さまざまな変遷があった。

今回の発掘隊では校歌・市歌・県民歌・国歌にまつわるそれぞれの事情を、演奏などを交えながら解き明かした。

今回は八聖殿に古いオルガンがあることから、同館との共催という形で開催することになった。主な内容は以下のとおり。

メインテーマの話の前に、まずはいわゆる「ご当地ソング」から入っていく。この会場、八聖殿のすぐ近くにある三溪園にゆかりのある歌の話だ。

大正 12 年に発生した関東大震災、横浜も壊滅的な打撃を受け、多くの方が犠牲となった。その 2 年後である大正 14 年に、「横浜に活気を取り戻そう！」というところから、「濱自慢（復興小唄）」が生まれた。作詞は原三溪、言うまでもなく三溪園の生みの親である大実業家だ。

この歌詞には、磯子区民にとって興味深い一節が…「屏風ヶ浦の朝なぎに」、と書かれている。まだこの頃の磯子境界は埋め立ても小規模で、私たちが今いるこの八聖殿のそばまで海岸線があった時代、懐かしい風景が歌として残されているのだ。

どんな歌だったのか、聴いてみよう。

横浜芸妓組合が演じる『濱自慢』（はまれぼ.com）

<https://www.youtube.com/watch?v=kMKwbzvyYkU>

続いてご紹介するのは『磯子小唄』。大正時代から昭和30年代にかけて、芦名橋周辺に「花街」が栄えていたのは有名な話。昭和初期の活気ある街並みと自然が共存していた磯子の風景が、三味線と歌によってしみじみと描かれている。

**磯子小唄**

二上り調

根本賀代子 作詞  
町田 嘉章 作曲

いそごーこいしやわすれて  
----- エエなるか つきは  
おほろの ----- はるのうー  
みー よいよいよいよいよいながめ

♪磯子泊りに 嬉しい一夜  
あかしていわれぬ  
胸の内 胸の内  
よいよいよいよい 口舌 (以下省略)

この曲は東京美術学校（現在の東京藝術大学美術学部の前身）を卒業したのち、新聞記者を経て古典邦楽、日本民謡の研究家となった町田佳聲（かしょう 1888-1981）によるもの。



作曲に関わるものとしては、現在の視点から見てもかなり異端の存在で、昭和初期には独自の改良を施した「写音機」という、蓄音機を肩にかけて運ぶようなレコーダーを用いて民謡収

集で全国を巡るなど、極めて精力的な研究を行っていた。

その40年近いフィールドワークの集大成として『日本民謡大観』を完成、日本の民俗音楽史に大きな足跡を残したことでも有名である。

### 【小学校校歌】

続いて「校歌」の話である。この企画を立ち上げるにあたり、横浜市内の小・中学校の校歌にはどのようなものがあるか調べ始めました。古くは『海ゆかば』で知られる信時潔や、オペラからポップスまで幅広い作品で知られた高木東六など、有名な作曲家による作品が数多く残されているが、その中でも興味深かったのが加山雄三作曲（ペンネームである弾厚作）、岩谷時子作詞による小机小学校の校歌。こちらは昭和58年7月20日制定とのことである。

著作権の関係上、本日は楽譜をお見せ出来ないのだが、ちょっとだけ実際に音にしてみたい。（オルガン演奏：中村牧）

私の感想としては加山雄三らしさ、という点よりも、シンコペーションを多用した、わりとポップな、まさに歌謡曲的な雰囲気が感じられたと思う。

小学校名	作詞者	作曲者	開校	校歌制定
杉田	福田正夫	松井健祐	明治6年	昭和25年
浜	大森幸雄	松井健祐	昭和19年	
磯子	野瀬寛頭	松井健祐	明治6年	昭和27年
滝頭	勝承夫	平井康三郎	昭和3年	昭和38年
根岸	林柳波	井上武士	明治14年	昭和33年
梅林	神保光太郎	土肥泰	昭和30年	
汐見台	甘利義久	小野達治	昭和42年	
岡村	勝承夫	井上武士	昭和38年	昭和42年
さわの里	坂田映子※	横山裕美子	平成19年	
山王台	小林勇	大久保三郎	昭和55年	昭和56年
屏風浦	新倉しげる	米山正夫	昭和31年	昭和33年
森東	岩本飛行六	矢野義明	昭和51年	
洋光台第一	鈴木作良	中田喜直	昭和46年	昭和50年
洋光台第二	とうたいりう	石渡日出夫	昭和46年	昭和49年
洋光台第三	金子保雄	小野達治	昭和48年	昭和53年
洋光台第四	渋谷重夫	新井千音美	昭和49年	

さて、もう少し範囲を絞って磯子区内の小学

校の話をしていただく。例えば、洋光台第一小学校校歌の作曲は、『小さい秋』や『夏の思い出』などで知られる中田喜直によるもの。

その他、作詞・作曲に携わった有名人の名前が数多く見受けられるが、今回私たちは、このリストの中に最も名前が入っている松井健祐という人物に着目した。



松井健祐は明治33年東京生まれ、青山師範学校卒業後、本所の中和小学校訓導を経て、大正9年に東京音楽学校甲種師範科へ入学した。ちなみに、中田章、岡野貞一

松井健祐（1900-1989）や信時潔など、日本を代表する作曲家たちが教授陣として指導をしていた時代である。

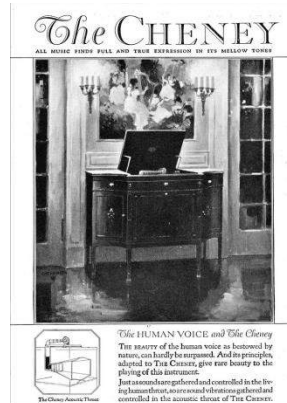
卒業後は浜松師範学校、東京府立八中での教員生活を経て、昭和13年に横浜市の視学、戦後は指導主事として横浜の音楽教育に大きな影響を与えた。ちなみに「視学」とは、第2次大戦前の日本において教育監督をおもな仕事とした職ということで、人事や思想統制においても大きな権限を持つ職務だったとのこと。

退職後は学校図書株式会社へ入社、3年後には上野学園大学で後進の指導にあたるなど、日本の初等音楽教育の第一人者としてその生涯を全うした。

府立八中時代の教え子には、戦後日本を代表する指揮者で、日本フィルハーモニー交響楽団の生みの親としても知られる渡邊暁雄がいた。

音楽の授業で音源を聴く「鑑賞教育」というものは、現在では一般的となっている。彼が府立八中で働いていた頃は、言うまでもなく蓄音機が極めて高価なものだった。しかし、その時の校長だった岡田藤十郎という人は音楽教育に大変理解のあった方だったということもあり、

舶来品のチニーというメーカーの蓄音機を購入してもらうなど、松井の仕事に全面的に協力してくれたことが、彼の言葉で残されている。そのような日本の音楽教育のすそ野を広げるきっかけを作った偉業は、もっと評価されて然るべきであろう。



画像はいずれも  
1920年代のチニー社製蓄音機

磯子の校歌にかかわった人物として、もう一人挙げておきたいのが米山正夫である。磯子で生まれ、旧杉田劇場でデビューした「昭和の歌姫」美空ひばりが、その初期に歌った『リンゴ追分』や『車屋さん』『津軽のふるさと』などを作曲した人物として、日本の歌謡曲界に大きな足跡を残し続けてきた。そんな彼が、屏風浦小学校の校歌を作曲しているのだ。制定が昭和36年5月11日とあるので、今から約半世紀前に書かれたもの。

（オルガン演奏：中村牧）

もし、米山が書いた校歌が、ひばりの通っていた滝頭小学校だったら、さらによかったのに…といった思いもあるが、こういった形でゆかりある作曲家の足跡を残してもらえたのは、何とも素敵な話ではないだろうか。

校歌のお話の最後に、各小学校の歌詞を比較してみよう。校歌というものは、たいてい、町の歴史とか風景が歌われているので、ご当地ソングといってもいいと思う。各校の特徴をキーワードで比較してみた。

小学校名	歌詞の中にあるキーワード					
杉田	梅	屏風浦	岸	海	海苔	漁員
浜	海辺(2)	海	銀の波			
磯子	かもめ	青い海	船	波止場	横浜港	
滝頭	港	沖	大海	海	波	
根岸	入江	小波	山	樟樹		
梅林	梅(2)	梅林(4)	海(5)	太平洋		
汐見台	丘	富士	根岸湾			
岡村	海	港	丘	もり	三殿台	白梅
さわの里	桜	いちよう	円海山	氷取沢	上中里	丘
山王台	海(3)	丘(3)				
屏風浦	船	沖	東京湾	丘(2)	かもめ	海
森東	根岸湾	海	森			
洋光台第一	海(3)	船	富士	丘		
洋光台第二	海	山				
洋光台第三	富士	波	かもめ(2)	海	丘	
洋光台第四	円海山	矢部野	海			

青色が海に関係する言葉で、黄色は丘や山に関するワードである。ほかに紫色が植物。

海に関わる言葉が入っていないのは「さわの里小学校」のみ。学区が氷取沢、上中里なので「海」が入らないので当然と言えば当然だ。

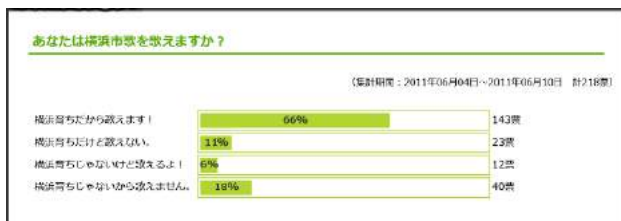
逆に杉田小、浜小、磯子小、滝頭小、梅林小、森東小では海関連のキーワードばかり。

また、杉田小と梅林小に「梅」という言葉が入っているのは、杉田梅を誇りにしているからだろうか。

富士山が出てくるのが汐見台小、洋光台第1、第3小学校。学校からの風景が目に見えよう。

## 【横浜市歌】

さて、ここからは『横浜市歌』について。



このグラフは、web サイトでおなじみの「はまれぽ」が2011年に調査したものの引用だが、この時点でも横浜市民の半数以上が歌えるという、全国的に見てもかなり驚くべき結果が出ている。

この『横浜市歌』、明治42年(1909)7月1

日の横浜開港50周年記念式典で披露されたものだが、現在、市民が歌っている『横浜市歌』、実は昭和41年(1966)に当時の横浜市長だった飛鳥田一雄の指示により、より歌いやすい音楽へと直されたものだ。

ここからは「いま、市民が歌っている横浜市歌はどのように変わったか?」、その理由をお話ししていくが、その前に市歌の作曲者を紹介しておこう。

作曲者は南能衛という人。明治14年(1881)徳島県に生まれ、昭和27年(1952)に亡くなった作曲家だが、音楽教育家としての名声がより大きく知られている。

『横浜市歌』を作曲した当時、東京音楽学校で助教授(現在の准教授)として、オルガンなどを指導していた。また、唱歌編纂掛(しょうかへんさんがかり)という、今でいうところの、音楽の授業で歌う歌を作る人を決めたり、それらを教科書にするなどの仕事もしていた。

もし皆さんが南能衛の作品を聴いたことがあるという方がいらしたら、おそらくこの歌ではないかと思う。

村まつり

(オルガン演奏：中村牧)

ちなみに、楽譜には「作詞作曲不詳」とある。これはこの曲が収録された『尋常小学唱歌』（1911-14 編纂）が作成された当時、文部省の方針により作者は伏せられたためである。

これらを取りまとめていたのが、南も委員を務めていた唱歌編纂掛だった。

昔の音源があるので聴いていただく。

※昭和4年（1929年）11月25日のSPレコードより

合唱：横浜市立青木尋常小学校生徒

伴奏：日本ビクター・サロン・オーケストラ

<https://www.nicovideo.jp/watch/sm12160571>



さて、上の楽譜は現在皆さんが歌っている「横浜市歌」の楽譜である。昭和41年に直されたバージョンだ。

それに対し、下の楽譜はその前まで使われていた「横浜市歌」の楽譜である。昭和9年に公開された楽譜だが、現代の楽譜と見比べてどうだろうか。

この八聖殿に置かれているオルガンでも弾いてもらおう。

（新旧の市歌をひき比べ 演奏：中村牧）

ちなみにこのオルガンだが、昭和10年代、現在の兵庫県たつの市に工場を構えていた東洋楽器製造という会社が製作したものである。オルガンを専門としていた南能衛は、「横浜市歌」を作曲した3年後に東京音楽学校を辞め、その後は東洋楽器製造の技師長として、オルガンの製作にも関わったそうだ。

さて、上に書いたように、「横浜市歌」は昭和41年に飛鳥田市長の指示でできた「横浜市歌普及専門委員会」により改訂され、現在の楽譜に落ち着いた。その過程で、どのような修正が施されたかを見たい。

まず、大きな修正点①

「横浜市教育概要 昭和9年度版」横浜市教育課発行(P.10~P.12)



この16分音符の箇所だが、このまま歌うと非常に歌いづらい。

「しーまーじま」という部分、実際に歌うとなると「し(い)ーま(あ)ーじま」といった感

じに、16分音符の2つ目と4つ目が母音のようになるので、音をはっきり歌うことが難しく、あまり歌には向いていない音符の書き方になっている。歌詞がない楽器での演奏では難しくないのだが、歌詞がある声特有の問題である。

演歌でいうところの、「こぶし」という歌い方に近い聴こえ方がして、このように歌うと西洋音楽的にはあまり上品には聴こえないものとなる。

修正後は、伴奏は同じ音のままだが、歌のパートだけ簡単にした結果、とても歌いやすくなった。どちらも、16分音符の1つ目と3つ目の音を8分音符にただけなのだが、歌いやすさは段違い。「ふーねーこそ」の箇所も、まったく同じ修正をしている。

続いて、大きな修正点②



テンポは *Tranquillo*、イタリア語で「静かに」という意味が書き足され、前の部分に比べ穏やかな雰囲気変わった。実際の演奏でも、テンポは少しだが、ゆっくり目に演奏される。

そして、ここで重要なのはリズムの変更だ。旧版では「～みなと」のリズム。「み」の前の音符が付点8部音符、「み」が16分音符、「な」と「と」が8分音符になっている。

このまま歌うと、雰囲気としては「静かに」というよりは、「勇ましい」感じに聴こえないだろうか。

この歌自体が、行進曲のように作曲されているので、そのままの流れが続いているようにも感じる。行進曲、いわゆるマーチは殆どの場合、2拍子が多いのと、快活な部分とゆったり目な

雰囲気（トリオ）、そしてまた快活な部分の三部形式で作曲されていることが特徴として挙げられる。

修正後は、「み」を8分音符、「な」を付点8分音符、「と」を16分音符にした。その結果、より「静かに、ゆったりとした」雰囲気に聴こえるようになった。

それによって、ここで雰囲気がよりガラッと変わり、音楽としても変化が分かりやすくなった。リズムというものが、いかに音楽の印象を変えるか…という点でも、とてもお手本になる部分である。

その他の修正点も、簡単にだが触れておきたい。

この楽譜はピアノで弾くにはやや和音の密集が多く、ピアノで響かせるには重たく、透明感の少ない響きになると思われる。

これはあくまで推察なのだが、南能衛はこの曲を作曲する際、ここにあるようなリード・オルガンで作曲したのではないかと思った。

作曲技法や楽器法の観点から見ても、この楽譜をオルガンで弾いた場合は、ピアノに比べると複雑な倍音の交じりが少なく、当時のピアノの普及率を考えても、今以上に高価な楽器だったこと、そして何より、学校教育において明治時代から既にリード・オルガンが日本国内で多く流通していたことを踏まえると、ほぼ間違いないと考えている。

それらの修正がされたおかげで、作曲をした南能衛が本当に表現したかったことがより分かりやすくなり、実際に演奏する人たちも理解がしやすくなったことで、この曲が多くの人々に知られ、現在も歌われ続けることにつながったのだろう。

ここからは『横浜市歌』の歌詞が、どのようにして作詞されたかという話をしていく。

作詞者である森鷗外にとって、曲に詞を付ける作業というのは初の試みだった。しかし、彼は当時の日本では非常に珍しい方法を用いて、「横浜市歌」の作詞という歴史的な作業を成し遂げた。

まずは、鷗外が思い描いた当時の横浜港の風景を見ていただく。



この絵は、明治時代の横浜港の様子を描いたもの。開港前の横浜は、100戸足らずの家しかなかった、漁民と農民による静かな村だった。

しかし、アメリカからの黒船の来航により嘉永7年に「日米和親条約」が結ばれると、僅か5年後の安政6年に横浜港が開港される運びとなった。

そこまでに外国人居留地をはじめ、波止場や税関など、国際的な港としての整備が突貫工事で行われた。

まずは、鷗外が書いた原文そのままを見ていただきたい。

わが日の本は島國よ 朝日輝ふ海に  
 聯り峙つ島々なれば あらゆる國より舟こそ通え  
 されば港の数多かれど 此横浜に優るあらめや  
 むかし思へば苦屋の煙 ちらりほらりと立てり處  
 今は百舟百千舟 泊る處ぞ見よや  
 果なく榮えて行くらん御代を 飾る寶も入り来る港

先頃東京音楽学校から横浜市開港五十年の唱歌を作って呉れと託されたから、其方で譜を新しく先へ拵えて貰って、其れへ嵌めて歌を作って見たいといった処、南教授の手に依って譜が出来上がったから聞いて貰ひたいといふ案内があつたので、早速同校へ出張して譜を見、曲を聞くと、七五、七三、八七、八七、七七、七七、七七、七七、七五、七三、八七、七七といふので…

さて、この文章は明治42年に、鷗外の談話として残された都新聞（みやこしんぶん）の記事からの一部である。ちなみに、「都新聞」とは、現在の東京新聞の前身となった新聞。

この横浜へのリスペクトに満ちた歌詞だが、実は驚くべき方法で書かれたのである。

**横浜市歌** 森 林太郎（鷗外） 作詞  
 南 悠 彦 作曲  
 市歌普及委員会 編修編曲  
 小松幸次郎 ピアノ編曲

(一般用)

Tempo di marcia (♩ = 88-104)

わがひのものはしまぐによ  
 いまはももふねももちふね  
 あさひかがようみにはつらなりそはだつ  
 とまるどころでみよやはてなくぞかえ  
 しましまなれば あらゆるくによりふねこそかよえ  
 ゆくらんみよせか 一ざるたからもいりくるみなど

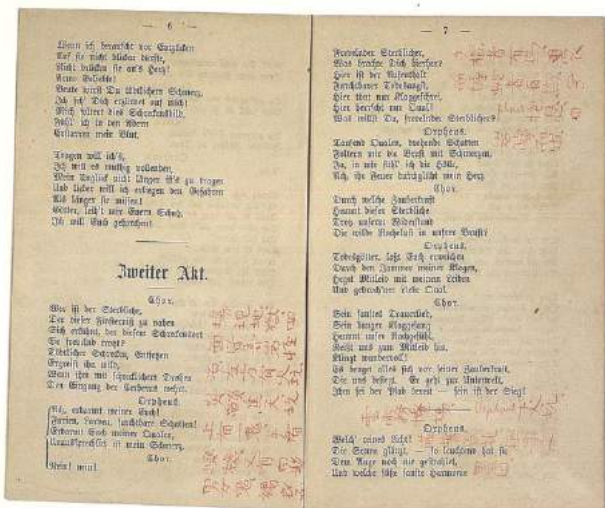
例えば最初の七五のうち、七は「わがひのものは」(7字)、五は「しまぐによ」(5字)、その後の七三の七は「あさひかがよう」(7字)、三は

「うみに」(3字)といった具合に、鷗外は音符のリズムと流れを意識して、歌詞を当て嵌めました。

彼は楽譜を読むことはできなかったといわれているが、ヨーロッパ文学(おもにドイツ語)を日本語に訳すなど多言語を用いた作業の経験が豊富だったので、言葉の韻の踏み方には長けていたと考えられる。まるでこの楽譜を初見で歌えたかのような、見事な割振りである。

また、実は鷗外という人物は、陸軍省に入省した3年後の明治17年、軍医としてドイツの衛生学を学ぶため、かの地へ留学している。最初の滞在地であるライプツィヒでは、その1年ほどの期間でワーグナーのオペラ『ローエングリン』(これは脚本を購入するほどに関心が深かった)をはじめとする、ヨーロッパのクラシック音楽に大きな関心を持ったとのことだ。

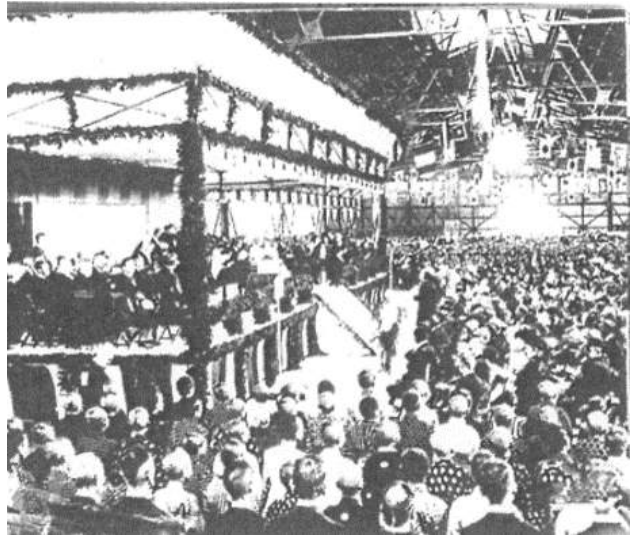
当時で、その1年間に30公演近いコンサートに訪れたというほどの熱のあげようで、実はその体験もきっかけとなったのか、フランスの作曲家グルックのオペラ『オルフェオとエウリディーチェ』の日本語訳を作成するという、当時の日本の文筆家としては画期的な作業を行ったのである。



参考までに、この画像は、鷗外自身が脚本にメモ書きをしたもの。

「横浜市歌」における作詞の作業の方法と、

大きなつながりがある貴重な記録の一つである。



「横浜市歌」は明治42年7月1日の横浜開港50周年式典の祝賀会にて、横浜市内の小学校(下のリスト)から集められた300人ほどの児童合唱が、横須賀の海軍軍楽隊の伴奏で初演され、大変華やかな様子となった。

楽譜が完成してから僅か約2週間後、さらにペストという大変危険な伝染病の流行により、楽譜が正式に生徒たちの手に渡ったのが2日前という状況での初演だった。そのような時間のない中、練習はととても大変だったものかと推察される。

- |          |             |        |
|----------|-------------|--------|
| 本町小学校    | 南吉田第三小学校    | 平楽小学校  |
| 南吉田小学校   | 太田小学校       | 江吾田小学校 |
| 元街小学校    | 岡野小学校       | 宮谷小学校  |
| 吉田小学校    | 神奈川小学校      | 子安小学校  |
| 戸部小学校    | 浦島小学校       | 大岡小学校  |
| 青木小学校    | 森中原小学校(杉田小) | 日野小学校  |
| 西平沼小学校   | 西戸部小学校      | 日下小学校  |
| 二谷小学校    | 老松小学校       | 神橋小学校  |
| 壽小学校     | 北方小学校       |        |
| 石川小学校    | 本牧小学校       |        |
| 根岸小学校    | 横浜小学校       |        |
| 磯子小学校    | 南吉田第二小学校    |        |
| 南吉田第一小学校 | 日枝第一小学校     |        |



選ばれた 34 の小学校のうち、磯子区からは 3 校が参加。その 3 校とは、磯子小学校と、根岸小学校、そして森中原小学校（現在の杉田小学校）の皆さんである。

その後、『横浜市歌』はどのように発展、普及していったか…その一端をお聴きいただきたい。  
ブルースバージョン

<https://www.youtube.com/watch?v=rX1x3pJdBAE>

ブルースバージョンの小学生合唱版

<https://www.youtube.com/watch?v=NpDr7gLHV0>

盆踊り版アラメヤ音頭

<https://www.youtube.com/watch?v=f1gptQ4oLE>

行進曲風 祝典序曲

<https://www.youtube.com/watch?v=O7pSH6Qn5g>

## 【神奈川県民歌】

神奈川県民歌  
光あらたに  
作詞 村松 謙吉  
作曲 藤 永夫  
編曲 坂田 俊夫

<https://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/800174.mp3>

神奈川県民歌『光あらたに』は、昭和 25 年 5 月 10 日に制定された。

先駆けること昭和 6 年 2 月、『神奈川県々歌』という曲が制定されたのだが、これはあまりに普及しなかったということで、昭和 23 年の文化の日、神奈川県章制定のタイミングで県民から歌詞を公募し、完成に至ったという経緯がある。

しかしながら、「横浜市歌」と比べ（そもそも、「横浜市歌」の普及率の高さは全国レベルでも異様なほど高い）、県民歌の存在感は現在に至るまで薄い、という残念な状況が続いている。

なお、この曲の歌詞は、現在は 3 番までなのだが、実は「幻の 4 番」があった。しかしながら、「鎚の響」「黒けむり」といった歌詞が、戦後復興の象徴的風景ともいえる工場の騒音や煤煙など、言い換えれば「公害」を想起させるとして、昭和 43 年に時の県知事である津田文吾が「時勢にそぐわない」と削除を提案、刊行物での掲載が見送られることとなり、現在ではその存在が忘れられている。

（幻の 4 番）

晴れてこころのときめくは  
いまよみがえる 町にきく

**鎚の響よ 黒けむり**

ああ神奈川は 新生の  
歴史の鐘の 鳴るところ

## 【君が代】

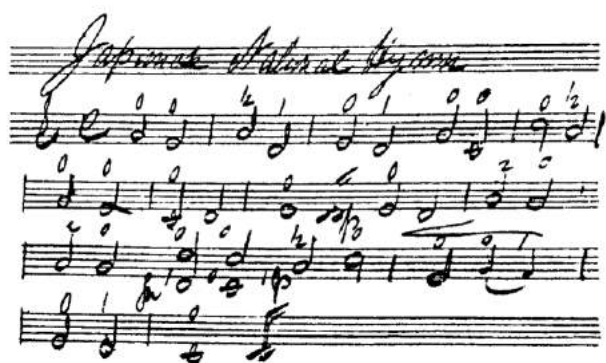


明治 2 年 (1869) のこと、当時のイギリス公使館護衛隊歩兵大隊の軍楽隊長であったジョン・ウィリアム・フェントンが、「日本に国歌がないのは遺憾であり、国歌あるいは儀礼音楽を設けるべき」との思いから自身による作曲を申し出、当時の薩摩藩砲兵大隊長であった大山弥助（のちの大山巖）の提示により、薩摩

琵琶歌の「蓬莱山」のなかにある「君が代」を歌詞として作曲を行った。

フェントンの作曲した『君が代』は、彼自身の指揮により薩摩バンド（薩摩藩軍楽隊）の演奏によって明治3年（1870）に山手公園にて初演された。その練習にあたり合宿地としたのが横浜の妙香寺である。

ここは「君が代発祥の地」であると同時に、「日本吹奏楽発祥の地」ともされている。



フェントン作曲の「君が代」

(オルガン演奏：中村牧)

現在、私たちが耳にする「君が代」に比べ、西洋音楽的な雰囲気が色濃く感じられると思うが如何だろうか。

しかし、このフェントンによる「君が代」はあまり評判が芳しくなかった。明治13年(1880)、当時の宮内省伶人（雅楽を演奏する人）の長であった林廣守を中心とした改訂委員によって、新たな旋律と西洋的な和声（海軍軍楽教師であったフランツ・エッケルトの手による）を施された現在の「君が代」が作曲され、同年11月には公に披露され、現在に至る。

ちなみに、どういった経緯でこうなったのかは今回追跡しきれなかったのだが、明治12年（1879）の『保育唱歌』には、「サザレイシ」という、こんな曲が載っている。



保育唱歌「サザレイシ」楽譜。「東亜音楽論叢」より。

(オルガン演奏：中村牧)

歌詞は「君が代」と同じなのに、メロディーはまったく別物なのだ。

そして、明治14年（1881）には、日本初の唱歌の教科書として発行された『小学唱歌集 初編』に、現在の「君が代」とは異なる「君が代」が掲載された。



(オルガン演奏：中村牧)

この版の原曲は、18世紀のイギリスの作曲家であったサミュエル・ウェップのものと伝えられており、小学校でも当初はこちらの版が教えられていたとのこと。

「君が代」に関してはいろいろ賛否があるが、その歴史を調べていくと、まだまだ謎があるようだ。

[了]